

ウィンドブリック施工要領書

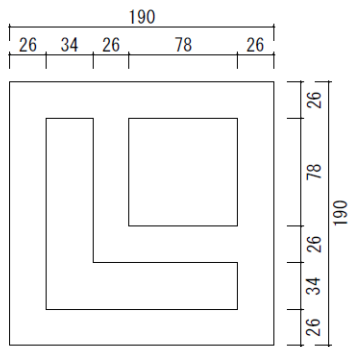
目 次

1.	使用材料	・ ・ ・	3 P
2.	施工手順	・ ・ ・	4 P
3.	配筋図	・ ・ ・	5 P
4.	注意事項	・ ・ ・	6 P
5.	参考資料	・ ・ ・	7 P
	1) その他の使用材料		
	2) コンクリートブロックの配筋図		
	3) 基礎仕様		
	4) 注意事項		

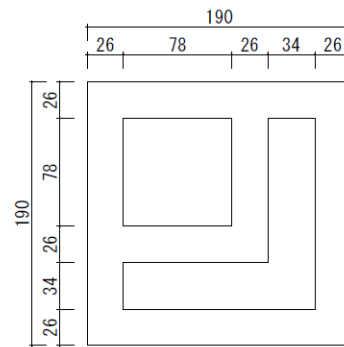
1. 使用材料

■ウィンドブリック LO型

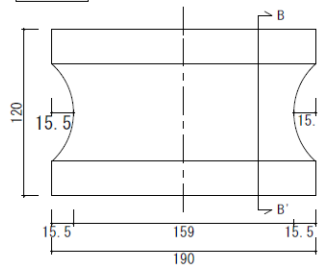
正面図



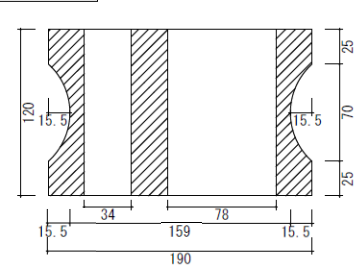
背面図



側面図

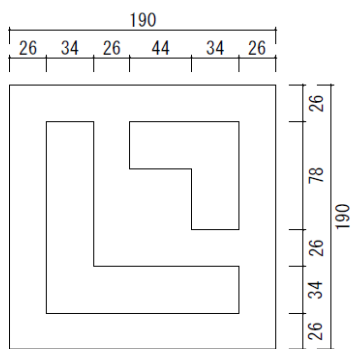


B-B'断面図

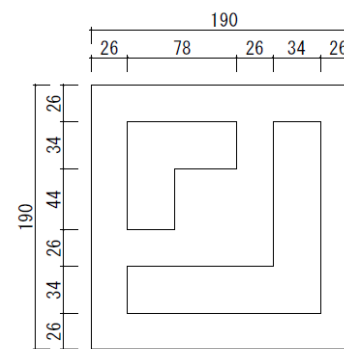


■ウィンドブリック LL型

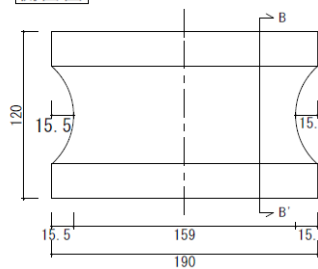
正面図



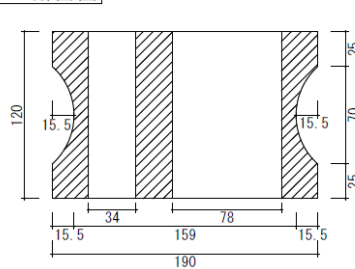
背面図



側面図



B-B'断面図

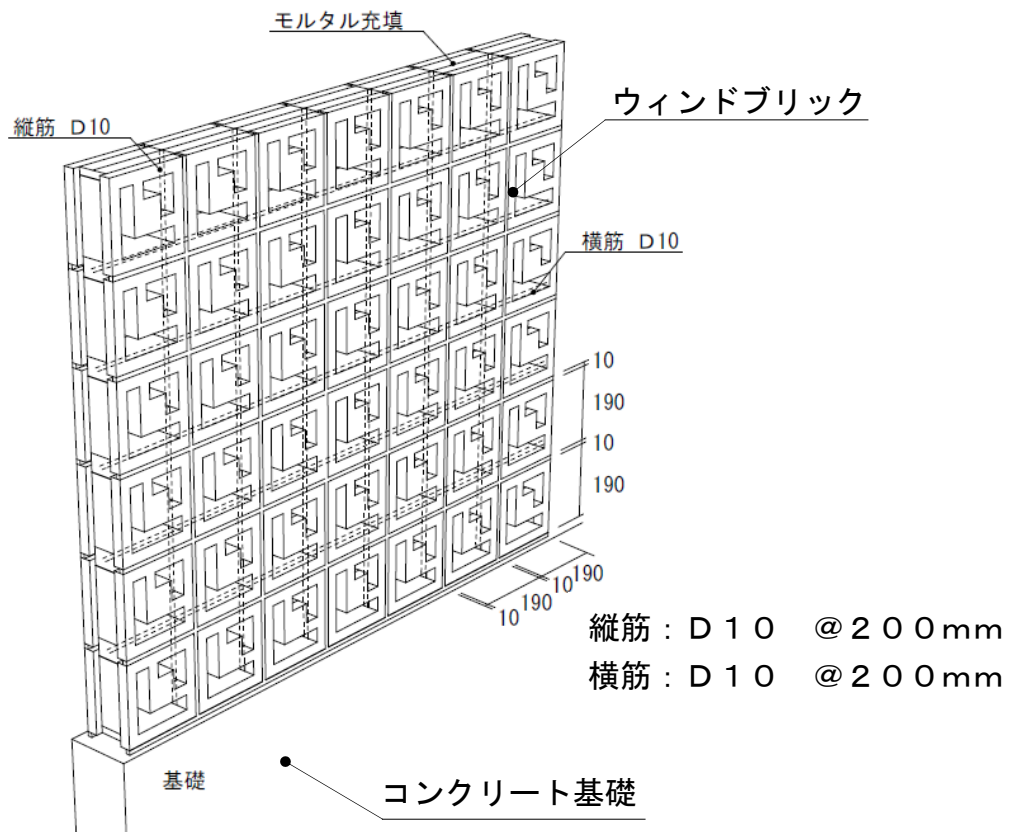


2. 施工手順



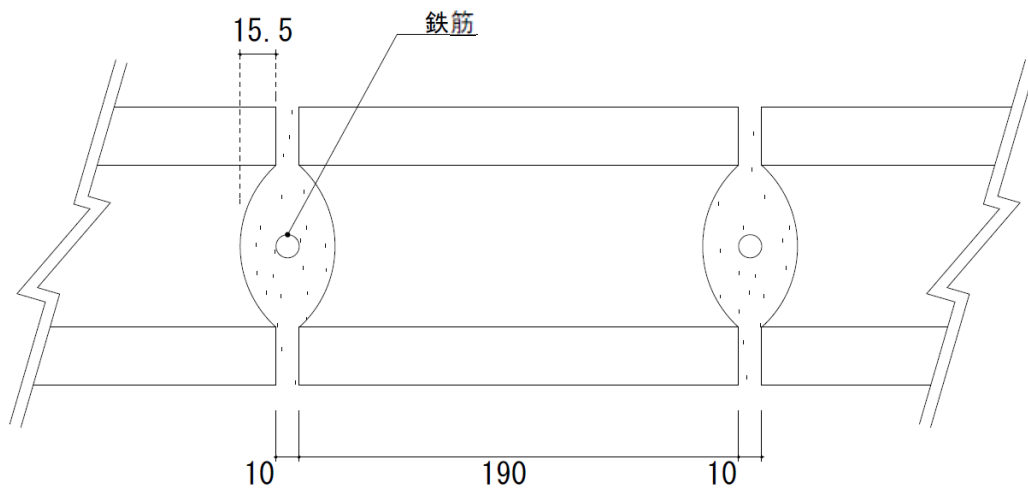
3. 配筋図

■ウィンドブリックの配筋図



■ウィンドブリックの配筋方法

ウィンドブリックには側面に配筋用のくぼみがあるので、くぼみの中心に配筋するようにして下さい。



4. 注意事項

1) 施工上の注意

ウィンドブリックのみで積み上げる場合は、高さ1200mm以下として下さい。
また、本製品の上にコンクリートブロックなどを積む場合は、必ず側面にも
コンクリートブロックか控壁を施工するようにして下さい。

鉄筋は、縦横200×200mmピッチで配筋して下さい。

ウィンドブリックは、5℃以下になる地域で使用した場合、焼き物の為、凍害による
ひび割れ、剥離が起こる可能性がございます。予めご了承下さい。

ウィンドブリックは表面が粗面の為、塗り目地施工はできません。

1本目地で施工をして下さい。

また、汚れが付着した場合、汚れをきれいに除去できない場合がございます。
施工の際は必ず、表面を養生して下さい。

ウィンドブリックは焼き物の為、寸法誤差、形状誤差、色ムラ、鉋物の混入、
ヘアークラックがある製品です。寸法誤差については目地にて調整をお願いします。

2) 安全上の注意

製品本来の目的・仕様以外でご使用になると危険ですので十分ご注意下さい。

本製品は、雨露の当たらない場所に保管して下さい。

雨天時や積雪時、強風時など、施工に支障のある場合は施工しないで下さい。

ウィンドブリックには、転落防止柵としての機能はございません。

5. 参考資料

1) その他の使用材料

a) ブロック

組積するブロックは、JIS A 5406「建築用コンクリートブロック」の規定に適合するブロック、もしくは同等以上の品質を有するブロックを使用して下さい。

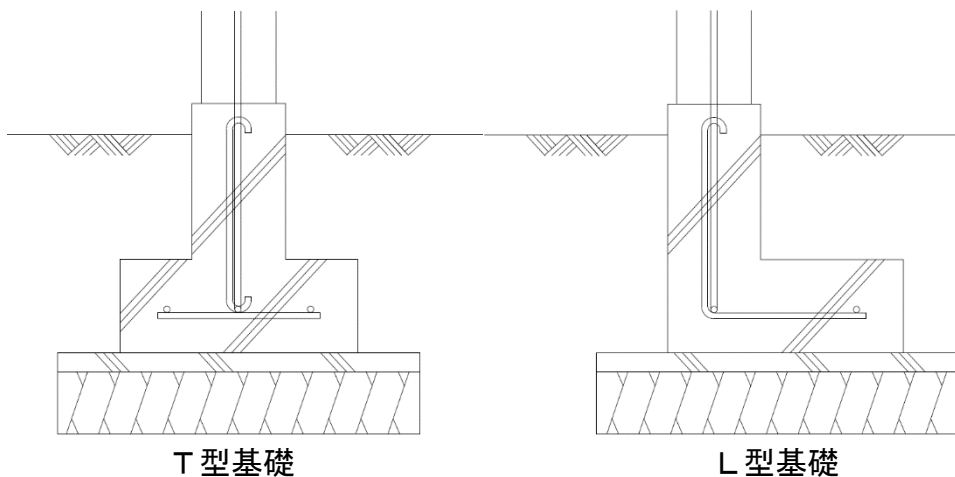
・ブロック塀の高さ

塀の高さ（GLより測る。地盤に高低差のある場合は、低い面から測る）は、2200mm以下として下さい。側溝に接した塀の高さ及び根入れ深さは、側溝の底面より測ります。地盤の含水比が高く締め固めが困難な軟弱土の場合、下表に示す塀の高さは、普通土の場合の数値より200mm以上下げて下さい。地盤が液状化するおそれのある場合、基礎の形状はT型として下さい。基礎の型により、塀の高さの許容値は下表のようになりますが、根入れ深さを増やすことで高さは2200mmまですることが可能です。

標準型基礎を有するブロック塀の高さ

単位(mm)

基礎の型		T型・L型基礎	
控壁の有無		なし	あり
地盤の性質	普通土	1600	1800
	良質土	1600	2200



・ブロック塀の厚さ

ブロック塀の厚さは、高さ2000mm以下の場合120mm以上、
2000mm以上2200mm以下の場合は、150mm以上として下さい。
基礎の厚さは、施工するブロックの厚さプラス30mm以上として下さい。

b) 笠木

笠木ブロック内に必ず壁頂横筋を挿入し、かつ縦筋をかぎ掛けするか、
または空洞部内に定着するようにして下さい。

c) 鉄筋

鉄筋は、JIS G 3112「鉄筋コンクリート用棒鋼」
又は、JIS G 3117「鉄筋コンクリート再生棒鋼」で規定する
SD 295 A、SDR 195以上の品質を有するD10以上の鉄筋を
使用して下さい。

d) モルタル

モルタルの標準的な調合を下表に示します。

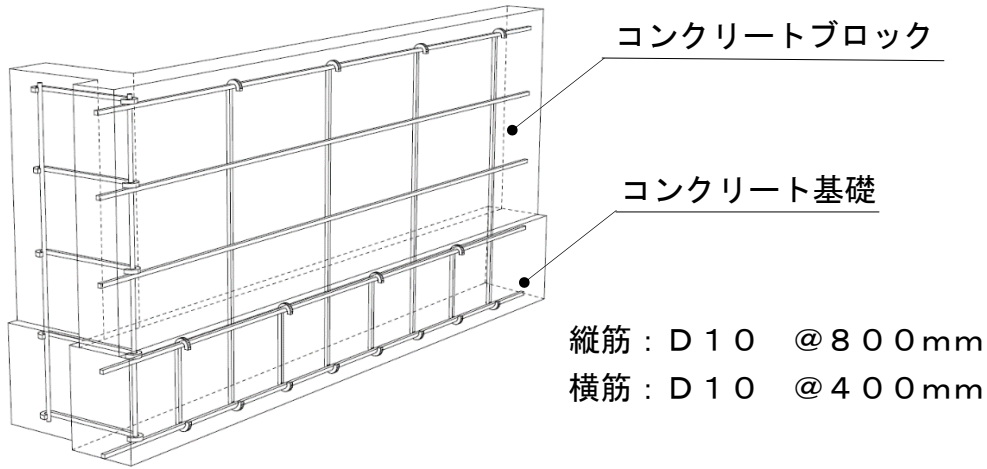
モルタルの調合

	セメント	細骨材(砂)	備考
目地モルタル	1	3	目地幅は通常 10mm
充填モルタル	1	3	中目砂を使用

モルタルの柔らかさは、水セメント比（水／セメントを50%以下に保つ）で
管理し、細骨材（砂）の量で調整して下さい。水だけで調整すると、圧縮強度
不足や、乾燥収縮によりひび割れ等が発生するため、十分注意して下さい。

モルタルの28日圧縮強度は、18ニュートン/mm² 以上として下さい。

2) コンクリートブロックの配筋図



3) 基礎仕様

a) 基礎

塀の下部には、塀を安全に支持し、かつ連続する鉄筋コンクリート造の布基礎を設けて下さい。控壁の基礎と塀の基礎とは一体にして下さい。

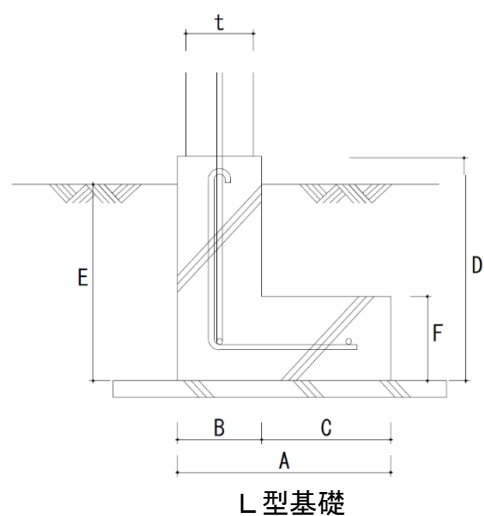
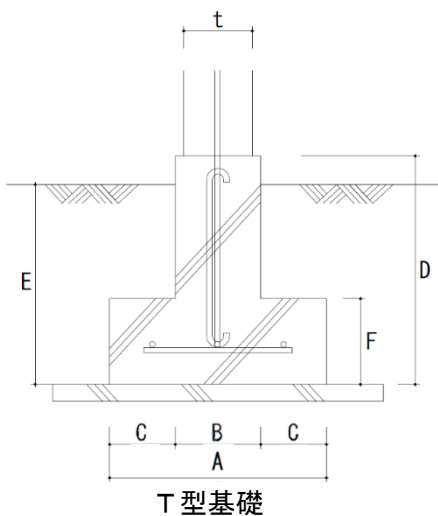
布基礎に型枠ブロックを使用することができます。その場合は、型枠ブロックは防水性のあるものとし、打込みコンクリートの厚さ（立上り部 B）は塀の厚さ（t）より30mm足した数値以上として下さい。

塀の基礎の型・寸法・根入れ深さ等は、下表及び下図に示す数値以上として下さい。

基礎の型及び標準寸法

単位 (mm)

基礎の型	根入れの深さ E	布基礎の高さ D	立上り部の幅 B	基礎フーチングの張出し幅 A	基礎フーチングの幅 C	基礎フーチングの厚さ F
T型基礎	300	350	t+30	立上り部の両側に各130	立上り部の幅B +260	150
L型基礎				片側に 400	立上り部の幅B +400	



b) 基礎の配筋

塀及び控壁の基礎は、D10以上のスターラップを使用して下さい。

塀の基礎には、D10以上のあばら筋を500mm以下の間隔で配置し、

主筋に180°フックでかぎ掛けして下さい。

基礎フーチング部分のベース筋は、D10以上の鉄筋を500mm以下の間隔で配置し、その先端にD10以上の配力筋を配置して下さい。

L形基礎のあばら筋及びベース筋は、D10の鉄筋をL形に曲げ配筋することができます。

控壁の基礎と接合する塀の布基礎の主筋は、通し配筋とするか、それらの基礎に定着させて下さい。

c) 控壁の配筋

控壁の縦筋及び横筋は、D10以上の鉄筋とします。

外側部の縦筋は、下表が示す数値以上として下さい。

控壁の配筋		単位(mm)
塀の種類	ブロック塀の高さ	使用鉄筋
補強コンクリート ブロック塀	1800 以下	D10
	1800 以上2200以下	D13
型枠ブロック塀	1800 以下	D13
	1800 以上2200以下	D16

d) 控壁

高さが1200mmを超える場合は、塀の長さ3400mm以下毎に400mm以上突出した控壁を設置して下さい。

塀の端部より800mm以内に控壁を設置して下さい。

塀が交差する場合は、その交差角度が塀の直角方向に対し45°以下で施工、かつ交差角度により塀の長さが最小400mm～600mmある場合は、控壁と同等とみなすことができます。

控壁は、鉄筋により補強し、塀と連続させて下さい。

控壁の基礎は塀の基礎と同等以上とします。

e) ブロック塀の配筋

塀に挿入する鉄筋はD 10以上とし、その縦筋の間隔は下表の数値以下とし、横筋間隔は800mm以下として下さい。

縦筋は、ブロックの空洞部内で重ね継ぎをしないで下さい。

塀の縦筋は、基礎に定着させ、壁頂横筋にかぎ掛けするか、または壁頂の空洞部に定着するようにし、基礎にその径の40倍以上定着させて下さい。

横筋は、横筋用ブロック内に配置し、塀端部において控壁に定着して下さい。

高い塀の長さが塀全体の過半を超える場合、高い塀の構造規定にて施工して下さい。

塀の交差部（出隅、入り隅等も含む）の縦筋は、D 13以上を使用して下さい。

定着が取れない場合は、横筋にフックを設け塀末端部の縦筋にかぎ掛けして下さい。

ブロック塀の縦筋間隔

単位 (mm)

控壁	ブロック塀の高さ	空洞ブロックを使用する場合	化粧ブロックを使用する場合		型枠ブロックを使用する場合
		縦筋間隔	ブロックの長さ	縦筋間隔	縦筋間隔
あり	1200以下	800	400 500 600	600	400
	1200以下	400 (800)	400 500 600	600	400
なし	1200以下	800	400 500 600	600	400
	1200以上 1200以下	400 (800)	400 500 600	400 (600)	400

4) 注意事項

a) 施工上の注意

既設塀の上部には増し積みをしてしないで下さい。

塀を鉄筋コンクリート造などの擁壁上部に設ける場合、高さ1200mm以下とし、塀は擁壁施工と連続して行い、縦筋をその径の40倍以上擁壁に定着させて下さい。

既設塀の上部には、屋根・工作物などを設けしないで下さい。

b) 安全上の注意

ブロック塀は、安全のため塀の上へのぼったり、重量物を載せたりしないで下さい。

ブロック塀は、破損がある場合、速やかに修繕し現状復帰を行って下さい。

塀は隣地境界、防犯、プライバシーの保護を目的とするものです。

門柱は人の出入りを目的とするものです。

擁壁は切土や盛土に際し、土の崩壊を防ぐことを目的とするものです。